山田俊雄著

ことばの履歴

山田俊雄著

ことばの履歴

岩波新書

188

山田俊雄

1922年東京に生まれる
1944年東京帝国大学文学部卒業
専攻 ― 日本語の歴史
現在 ― 成城大学学長
著書 ―「日本の文字」(岩崎書店)
「日本語と辞書」(中央公論社)
「詞林逍遙」(角川書店)
「詞林間話」(角川書店)

ことばの履歴　　岩波新書(新赤版) 188

1991年9月20日　第1刷発行 ©

著　者　山田俊雄（やまだ　としお）

発行者　安江良介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋2-5-5
発行所　株式会社 岩波書店
電話 03-3265-4111(案内)

印刷・精興社
製本・永井製本

定価はカバーに表示してあります

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-430188-2

目　次

I　ことばの保守主義……1
キタ・セクスアリス(2)　木賃アパート(7)　春鶯囀(12)　振り仮名の話(18)　慣習句の洗練(23)　振り仮名のある書物(30)　読みにくい漢字(36)　花の名前(41)　電覧(47)

II　用語百態……53
しばゐと演劇(54)　天気予報(60)　千早振る神無月(66)　ひとつ返事(72)　たすき一本(78)　どぐらまぐら(84)　熟字(89)

III　語形感覚……95
郵便はいたつ(96)　龍(102)　おもねる(108)　町人(114)　むつかしい(120)　「の」の字(126)　些事

(131) 花さか爺(137) ステンショ(143) 三十一字(150)

IV 作家の語彙 …… 157

所労(158) スチームと粉薬(164) 頬返し(169) 随読随筆(175) 一字の迷い「り」(181) 云々する(187) 多数の犬(192)

V 辞書の周辺 …… 199

言語同断(200) 腕をこまねく(206) 明治は遠い(212) 闇から牛を引出す(218) 鹿角りんご(223) ジャックの図柄(228)

あとがき

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongboo

I　ことばの保守主義

キタ・セクスアリス

某月某日、朝、新聞を見ると、第三面に、

外来語表記、33年ぶり見直し　国語審着手

という、五段抜きのキャプションが目に入った。そして、その横に「ゼネレーションか　ジェネレーションか」と横書きで示し、「原音尊重の声強く」と記してある。国語審議会のきめることが、日本人の使うことばや文字に、妙な強制力をもって歪みを生じさせることもあるので、私はあまりこの種のニュースに追随するつもりがない。話の枕にするだけである。

ところで、つい最近の新聞夕刊の一つに、次のような記事があった。

ある近世文学研究家の文章で、天愚孔平（てんぐこうへい）の伝記を調べて、いずれそのうちにそれを公刊するような風に解せられることを述べている。その文章の中に、

天愚は松江藩士。奇人である。奇人だから人の注目をひく。しかしそのひき方甚しく芳しからず、ケチでホラ吹きで異様で、そのうえ自己宣伝の鼻持ちならぬ男といわれる。わずかに千社札の創始者として、その道の人に珍重されるが、これも本人がそう宣伝しただけという。この悪評も無理からぬことで、すべてが天愚自身ふれまわつたこと。さらにまた、馬琴が聞き書きした天愚の自伝なるものがあり、これがイタ・セクスアリスを述べて、江戸人の自伝としては破天荒のもの。ともかく一筋縄でいく人物ではない。

今、右の抄出は新聞の紙面をそのまま、ここに移したのであるが、現代かなづかい風の表記をしている。

この部分をよく調べてみると、片仮名を使ったところは、「ケチ」「ホラ」「イタ・セクスアリス」の三つ。「ケチ」「ホラ」は外来語であるまいが、この文の筆者は平仮名では埋没してしまうから目立つように自ら工夫したのであろう。そうでないとしたら、他にも俗なことばについてはこういう風に和語でも片仮名で書く習慣があるので、それに倣ったのであろうか。

「イタ・セクスアリス」の方は、これは、性生活とか、性欲的生活とか、いう意味のラテ

ン語風のいい方だから、外来語といってよいであろう。しかし、ラテン語が外来語として直接に日本語社会の日常語に輸入されることは稀であろうから、この文脈でのこのイタ・セクスアリスは、普通語扱いで括弧を付けていないが、森鷗外の用いた小説名「キタ・セクスアリス」に拠っているところがあると考えられる。普通語として使われることがあるとしても、鷗外の小説の名に一度戻って見なければなるまいから、念の為『鷗外全集』を披いて見る。

金井湛が自分の性欲的生活の歴史を書くのだという設定である。もっとも、「性欲的といふのは妥でない。Sexual は性的である。性欲的ではない。併し性といふ字があまり多義だから、不本意ながら欲の字を添へて置く」という考え方だから、現代風に訳せば、鷗外の「キタ・セクスアリス」は、原語の綴り方では、この作品の最後に見えるように、

VITA SEXUALIS

という拉甸語であり、「性的生活」もしくは「性生活」になるべきものであった。

これで、明らかなことは、キタ・セクスアリスのキタは vita を日本の片仮名に移した姿である。しかも確かにラテン語に裏打ちされていて、片仮名で書こうが、ローマ字で書こうが、

何ら変ることがないもの、と鷗外は認識していたように想像される。もしこれを口の端に上せんとするときは、むしろラテン語の vita を囀るべきところであったと思われる。

そうしてみると、現代人がイタ・セクスアリスという語(もしくは仮名綴り)を文章の中で用いているのは、何を表わしているつもりなのだろう。

かつて他の人の文章においても同じようなことを見た記憶があって、かれこれ十年ほど前に学会の公開講演会でそれについて言及したことがあったものである。鷗外の「キタ・セクスアリス」を念頭においたらしい「イタ・セクスアリス」は、原語から遠く離れ、鷗外の思惑と違ってしまって零落した姿である。

鷗外の「キタ・セクスアリス」という作品は、外国語を、かなり沢山に文脈中に象嵌してあるもので、作品の標題を別として、この作品に限っていうと外来語に当るものは、たいていは片仮名で書く。

インク・コップ・シェルフ・ステッキ・ノオトブック・ハンケチ・ペエジ・ペン・ホテルなどのほかに、漢字で書くのは、瓦斯・烟管・咖啡・襦袢・零・烟草・亜鉛。また地名の、希臘・拉甸・独逸・伯林・羅馬・維也納。サンスクリットの盂蘭盆まで加えるにしても、およそは当代の社会の習慣にしたがっている。しかし、「キタ・セクスアリス」という表記は、

もっとひろい立場での鷗外らしい合理的な秩序の上に立っているのである。

試みに彼の評論を若干しらべてみよう。

キイスバアデン Wiesbaden、キイデルスプルホスフオル Widerspruchsvoll、キイデマン Wiedemann、キイデルゼエヘン(再見)、キイランド Wieland、キイン(維也納)、キオリン Violin、キジオネエヤ(幻像的)、キスラア Whistler、キタ・ミニマ、キユダヴレエ Ville d'avray、キルキユウル Willkür、キルヒヨオ Virchow、キルヘルム Wilhelm(維廉)、キルレ Wille、キキヤナ Viviana、レオナルド・ダキンチなど、原語の綴り字の Wi, Vi もしくは、Whi のあらわす音をキで写し取っているのである。

このキの場合の外にヲについてもみられることであって、ヲオヅヲオス(またヲルヅヲルス)、ヲブロオモフ、ヲルタア、ヲルテエル(またヲルテヤ・ヲルテエル)、ヲルフ、ヲルムス、ヲルフガングなど、これは wo, vo(の一部)に対応する。したがって、ヱについても we, ve を相手に考えるべきことになる。

最近、ある文庫本で、鷗外のこの作品の名を「ヴィタ・セクスアリス」という風に銘打って再刊しているのを見た。歴史的仮名遣いもどきとしてなら、むしろこの方が理屈に合っていると思った。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongboo

木賃アパート

土地の直段が知らぬ間に騰っていて、固定資産税が年々歳々高くなる。売るべきものでなくて、ただそこに居を構えているだけのことなのに、わけもなく年々に多く搾られるように仕組まれた制度は、不愉快でもあり、それに伴う住居についての悩みが、次第に恐ろしいことになりそうな情勢にあるのに気付く。

ある日の夕刊に次のような見出しがあった。

老後の安住奪う街
〃木賃〃アパート次々取り壊され
手届かぬ高価マンションに　暴走地価

もとの紙面をさながらにここに再現するのは、不調和でもあり、汚ならしい結果にもなる

から、いくらか品よく並べかえ、文字の大小なしに示して置く。

この記事の内容は、木造のアパートメントの建物の立っている土地が、地価の騰ってゆく時勢にさとい人々によって、買い占められる、買主にとっては建物は無用のものである。賃貸契約の延長を希望しても苛酷な条件なので更改ができない貧乏な年寄りには、次々に出て行ってもらうという。法律上は適法のことながら、不人情があたりまえになってしまっている。というようなことを、多少センチメンタルな調子に包んで述べている。

「木賃アパート」という標題の用語はこの記事の中ではふたたびは用いられていなくて、「家賃一〜三万円の木造アパート」という表現があるだけである。他に「木造アパート」「老人専用アパート」「老人用住居」などという用語も見える。

私は「〃木賃〃アパート」という風に横文字の文(これは坪内逍遥や森鷗外の用語に従えば「横文」である。仮名垣魯文や福沢諭吉も同じく「横文」を用いたし、ヘボンの辞書にもそれが見出される。ちなみにいえばタイプライターなどにいう「欧文」は、この「横文」からの派生か、それに触発された新生語かであろう)に普通に併用するところの引用記号の一種〃〃を使って「木賃」を強調している点に注意を強いられた。日本流に書けばさしづめ「木賃」アパートで、わざわざ、泰西の quotation mark を、前後逆にして、つまり〃を頭に右肩

につけ、〃を尾に左下隅につけて使ったのが目についたのである。

この〃と〃との前後左右の変換は、もちろん、横文固有のものを、軽薄な才人がいつかどこかで無思慮に用い始めたものの真似であろう。その新聞社のスタイル・ブックには、たぶんずっと前から載っていることであろうし、私にしたところが、ひょいと使いかねまいものでもないので、ここではもちろん圏外のこととしておく。

さて、この「木賃」アパートの「木賃」は、記事の中味によるとモクチンと読むものらしい。記者の配慮は、キチンを排してモクチンを喚起する便りとして引用符をもって括ったのであろうか。もしくは、「木造賃貸」の約言としての「木賃（モクチン）」に、旧時代の「木賃（きちん）」を二重に印象する技巧をあえて試みたものであろうか。そうだとすると、この記者は一種のsadistつまり貧乏な人や老齢の寄る辺なき人に対して苛酷な表現をもてあそぶ趣向のもちぬし、かも知れぬと思われる。

一歩を譲って、「モクチン」と「キチン」との重ね合わせは単なるペダントリーにすぎないもの、悪意はないものとして見てもよい。しかし、語感というものは、社会的共有の部分のほかに、きわめて個人的で特殊なものを伴うことが多い。その名を聞いただけで膚（はだえ）に粟を生じるとか、虫酸（むしず）が走るとか、そのような物の言い方の世の中に存在するのは、その個人的も

しくは主観的な語感の存在を証するものである。

私の、乏しい、言語についての素養や経験からいうなら、おそらく正常な範囲のものとは思うのだが、現実にその語が指すような宿屋に泊ったことは無いのに、「きちんやど」といえば、旅芸人の定宿、江戸お構いのならず者と隠れたる賢者との相部屋、あるいは諸国をめぐる仇討の寡婦と忠僕との仮寝の宿などという印象が付いてまわる。おおむね旧時代のものばかりである。もし現代にこれを求めれば、山間の湯治場ぐらいのものであろうが。

記者が〝木賃〟アパートをして、キチンヤドのキチンと連合せしめたものと考えてみると、その用字は、現代人には、いささか理会に不都合があるように思われる。

「木賃」つまり、「木の代金」と分析的に言い換えられるところの、木＋賃という語の複合構造の惹き起す意味的連関が、一見して立ちどころに納得しうるものでないからである。

「木の代金」とは何ぞ。

もちろん、そんなことは、辞典に訊ねてみれば、氷解するに時を要しない。しかし辞典を披いて見る労を費やすべき人が、少なくないことも確かなことで、ここにまず、件の新聞記者のささやかなペダントリーを、私が嗅ぎ取る所以である。また、多くの辞典に転義として、

宿泊料の安い粗末な宿屋

と釈するものや、

下等な安宿

と注するものが普通であるところからして「〝木賃〟アパート」という表記の、私に一種のsadismの臭味をあじわわせる理由が説明できる。sadismが用語として、この際不適切というなら、それは軽蔑であろうか、揶揄であろうか。私は、同時に不快を味わうのである。

しかしまた、辞典自体、今少し実情に即した情報を掲載してあればよいと私は思う。「木賃」はむしろ「薪賃」と書く方が、名実伴って、ふさわしい用字であったろう。その「薪賃」は、今はすでに旧時代近世の雑俳などには見えていた。必ずしも一般的で、「木賃」に優先して頻用されたかどうかは未証明だが、単独で「薪（き）」とするほかに「薪割（きわり）」「薪割客（きわりきゃく）」「薪屋（きや）」などの例もあるのである。

春鶯囀

東京という都会が周辺に向って広がる一方で、旧地域の再開発と称する建設が行われている。そんな地域にできたサントリー・ホールへ初めて出かけて見た。宮内庁楽部の、雅楽のコンサートを聴きに。聴きに行ったのだが、精確には、視(み)たり聴いたりしに行ったというべきかも知れない。

初めて入ったコンサート・ホールを開演前にあちこち視たのだから、ホールの出来工合をあげつらうのが順序だが、ここではそれを全部省略する。

行列をなして買った演奏曲目の手引きを、自分の座席で読んでみる。曲目の一つに「青海波」がある。「青海波」は、「輪臺」と組になっているもので、この日もその通りだった。それに「還城楽」がつづいていて、この二つがこの日のハイライトで第二部をなし、前座の形の第一部は、舞のない管絃楽と朗詠。朗詠は、公任(きんとう)の『倭漢朗詠集(わかんろうえいしゅう)』の上巻の春に、早春の題目の下に収める「東岸」であった。私の記憶では譜本『朗詠九十首抄』の巻頭に見えるも

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongboo